

■主な活動動の記録

●平成 27 年 3 月 10 日（火）宮島水族館見学

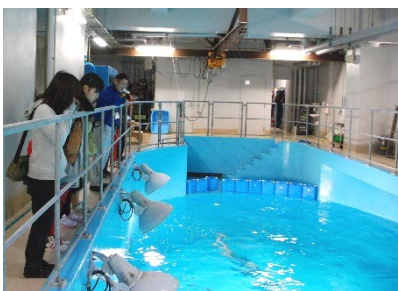
小雪の舞う大変寒い日でしたが、宮島水族館のスナメリに会いに行ってきました。

水族館では、まず瀬戸内海とその周辺の生き物を観察した後、飼育員さんのご案内でスナメリのいる水そうに行きました。

水そうの前に行くと、歓迎するかのように子どものスナメリ（イチゴちゃん）が元気よく泳いでやってき、水そうに顔を押しあて、かわいいポーズをしてくれました。



飼育員さんからは、スナメリの生態やえさ、呼吸のしかたなどを具体的に教えてもらいました。またバックヤードに入れてもらい、水そうの上から観察させてもらい、実際に海での見え方を体験することができました。



宮島水族館についたら、スナメリのところに案内してもらいました。そこで、飼育員さんからいろんなことを教えてもらいました。一番びっくりしたことは、お腹の線の数でオスカメスカがみ分けられるということでした。（以下、略） 【児童の感想文より】

●平成 27 年 4 月 23 日（木）地域の方からの聴き取り学習

スナメリが木原の海にいたころのことを知っておられる地域の方お二人から、当時の海の様子やスナメリのこと、鯨島のことを教えていただきました。

- ・ 当時はスナメリのことを「デゴン」と呼んでいた。
- ・ 鯨島の近くを 2～3 頭で泳いでいた。
- ・ 人なつこく、船の横に近づき泳いでいた。
- ・ 40～50 年前まではスナメリをよく見かけていた。ひいおじいちゃんからは「昔はいっぱい泳いでいたと聞いている。」と教えてもらった。
- ・ 木原の海には、以前アマモがいっぱい生えていて、小魚がいっぱいすんでいた。カブトガニやタツノオトシゴもすんでいた。
- ・ 鯨島の周りで、二種類のサザエがとれていた。
- ・ 工場ができたり、洗たく水を海に流したりしたため海がよごれ、スナメリがすめなくなったのではないと思う。



今日 4 時間目に奥川さんと脇西さんがスナメリのことを教えてくださいました。そこで分かったことが 3 つあります。1 つ目はスナメリはイルカと同じでむれで行動しているということです。2 つ目は、昔の海はきれいだったけど、洗たくなどの水により海がよごれてすめなくなったこと。3 つ目は大鯨島の周りにはサザエがいたり、タツノオトシゴなどがすんでいたこと。

昔のようにスナメリが帰ってきてくれて、スナメリといっしょにいたいから、海をきれいにして、スナメリを呼びもどしたいです。 【児童の感想文より】

●5月18日(月) 上嶋先生から瀬戸内海のことやスナメリに事を学ぶ

瀬戸内海エコツーリズム協会^{注)} 理事長上嶋英機先生より、瀬戸内海のことやスナメリのことを教えてもらいました。

<瀬戸内海について>

- ・瀬戸内海は陸に囲まれた海だが、海水は常に動いており、1～2年程度で入れ替わっている。
- ・木原の海だけを考えてはいけぬ。瀬戸内海全体の水の流れのなかで考えてほしい。
- ・まるで台風のように見える、直径1 Kmにもなる美しいプランクトンの渦が見える。(安芸灘など)
- ・サンドウエーブ、あまもの群生などすばらしい環境がある。

<スナメリについて>

- ・スナメリは世界中にいる。中国からインドシナ湾岸、そしてインドネシア・インド・ペルシャ湾などに広くすんでいる。日本でも、瀬戸内海をはじめ、九州(有明海・大村湾)、中部(伊勢湾・三河湾)、関東(仙台湾～東京湾)などにすんでいる。しかし、瀬戸内海のスナメリは他の場所のスナメリと遺伝子がちがいで、移動したり他の場所のスナメリと一緒にすることはない。
- ・生き物は「食べる-食べられる」の関係でつながっている。スナメリはイカナゴやカタクチイワシなどを食べるが、その魚は、もっと小さな魚を食べる。その小さな魚は…というようにプランクトンまでつながる。(食物連鎖という。)これら全てが豊かでないとスナメリはすめない。そのために海の生き物が安心してすめるアマモなどの植物がとても大切。
- ・スナメリは2～3頭の群れでいることが多い。お母さんが子供と一緒にいることが多い。お母さんが背負って育児することがよくある。お父さんは育児にかかわらないことが多い。
- ・スナメリの平均寿命は27歳。5歳～20歳までが赤ちゃんが産める年齢。出産期間は11か月。だからどんどん産んで数を増やすことが難しい。
- ・スナメリがよくみられる条件は、波が穏やかな日で、曇っていたり雨が降りそうとき。(体がクレーなので、くもっている方が見つかりにくいからだそうです。
- ・スナメリが少なくなった原因として、①定置網にかかって動けなくなり死んだ。②船のプロペラに巻き込まれてしまった。(1980年代に多い)③船の船底に塗ったスズの化合物により赤ちゃんを産めなくなった。④海砂を採ったため、住む場所がなくなった。などが考えられる。(他にも考えられる。)



注) 瀬戸内海エコツーリズム協会とは、「瀬戸内海の生態系景観を見つめ自然と文化を探り、多様な事前を守る」ことを理念に設立された一般社団法人。理事長は上嶋英機氏。



今日5・6時間目に上嶋先生から瀬戸内海の海のことやスナメリのことを教えてもらいました。私が一番びっくりしたのは、2万年前、中国地方と四国地方がつながっていて、瀬戸内海がなかったことです。

スナメリのことについては3つのことがわかりました。

1つ目は目撃情報。多い場所は香川県の粟島や山口県の周防大島あたりで7月と11月だということ。2つ目は曇りや上げが降りそうな日によく見られるということ。

3つ目はスナメリの平均寿命が27歳で、5歳～20歳の間でしか子どもを産めないということ。

スナメリとのアイコンタクトはなかなか難しいそうで、上嶋先生も3回しかできていないと言われていました。私は、何としてもスナメリに会い、アイコンタクトを試みたいです。

【児童の感想文より】

● 7月14日（火）鯨島周辺の環境調査

鯨島周辺の現状を知ることが目的に、船で上陸。海岸にいる生き物や水中の様子を上嶋英樹先生のご指導で調査しました。

見た目はゴミもなく、きれいそうでしたが、生物指標やCOD（化学的酸素要求量）検査によると、思ったほどきれいでないことがわかりました。



児童による調査結果（児童による調査のまとめより）

- ・いたる所にカキのついた岩があった。よく見るとそこには黒くなったりして、中身がない死骸のものも多かった。
- ・潮が引いた後にできた潮溜まり（タイド・プール）には海藻や貝類，ゴカイ，カニなどの生き物がいっぱいいた。
- ・本来は岩と岩の間に隠れて暮らしているイボニシ（貝）が日当たりの良いところで暮らしていた。上嶋先生によると「もうここしか住むところがないんだろう。」と説明してくださいました。
- ・汚れた環境にいる「ヒザラガイ」がいる一方で、きれいな所にいる「カメノテ」もたくさんいた。
- ・鯨島には少なくとも9種類の貝がいた。
カラマシガイ，ヒザラガイ，イボニシガイ，オオヘビガイ，カメノテ，マツバガイ，カキムラサキガイ
- ・海草は5種類あった。
アナアオサ，ヒジキ，ミル，アマモ，コンブ
- ・藻場について調べたが，アマモはあまり生えていなかった。
- ・島の周りには丸っぽい海草（ミル）がたくさん生えていた。きたない所に生える海草だ。
- ・指標生物を基に生物環境をチェックした。カメノテ，オオヘビ貝，マガキなどが見られた。計算してみると71点で，海は汚いとわかった。
- ・持ち帰った海水を顕微鏡で調べたが，プランクトンは見つからなかった。
- ・島の砂を採って調べた。主に石英を含む花崗岩だった。島の正面以外は透明なものが含まれていた。
- ・鯨島は現在鳥のコロニーになっている。鳥は3種類いた。鳥のフンが植物の葉にたくさんついており植物にとっては厳しい環境のようだ。

考えたこと

- ・藻場ができるようにアマモをたくさん増やさないといけない。
- ・フライパンやペットボトルが見つかった。ゴミを減らすためのポスターを作りたい。
- ・もう少し島の周辺を観察し、何をしたらいいかじっくり考えたい。
- ・プランクトンがいないと魚が生活できない。そのためスナメリがすめないという事になっているのではないか。だからプランクトンいっぱいいる海にし、魚を増やす必要がある。そのためにできることを考えたい。
- ・鯨島周辺の水質が悪いのは川にあると考えた。川から流れ出る水（生活排水）が海を汚しているのではないか。
- ・空気の汚れ状態を調べるため、今度は植物を採取し気孔を調査してみたい。
- ・塩についても調査してみたい。
- ・島にネズミがいた。どんな暮らしをしているのだろうか。環境や生き物にどんな影響を与えているのか調べてみたい。

活動の様子を伝える新聞記事



上嶋理事長（右端）の説明を聞く児童たち

中国新聞

備後

7月15日(水)

発行所
中国新聞社
〒730-8677 電話(082)236-2111
広島市中区土橋町7番1号

備後本社
〒720-0805 電話(084)923-1717
福山市御門町3丁目2番13号

無人島で生物調査

木原小12人 海の汚れ実感 三原

三原市の木原小の5、6年12人が14日、同市木原沖約400坪の無人島「鯨島」に小型ボートで渡り、海辺の生物の生息状況を調べた。

児童は、瀬戸内海エコツーリズム協議会（広島市南区）の上嶋英機理事長たちと、島を約1時間かけて巡り、砂浜や岩場のカメラやイボニシガイなどを観察。上嶋理事長は「岩肌が泥で覆われ、生き物がすみづらい状況になっている」などと説明した。6年松本朔哉君(11)は「見た目より海がずっと汚れていることに気付いた」と話した。

児童は本年度、授業の一環で、かつて木原沖で見られたスナメリを呼び戻す活動に取り組んでいる。8月には、付近の海域でスナメリが多く目撃されている山口県周防大島町を訪問。海辺の環境の違いなどを見て活動に生かす予定という。

（山本庸平）